

共に生きる

出雲市立斐川東中学校 三年 肥後杏奈

「見えない」ということは、自分の日常にどのような変化をもたらすのだろうか？もし自分が目を閉じて歩かなければならないのなら、自分は身近な誰かの存在をどれほど強く感じるのだろうか？見える世界では、当たり前のように通り過ぎていた小さな助けや優しさが、きっと何倍にも大きく心に響いてくるのだろう。

私が初めてこの問いに触れたのは、中学二年生のとき。視覚に障がいのある方と一緒に歩いたボランティア活動のときだった。

その日は、地域の養護（盲）老人ホームで行われたお祭りを、利用者さんと付き添いながら、バザーを回ったり、ステージで演奏やダンスを見たりした。私は、片目に障がいがあり目の見えにくい男性をガイドし、施設周辺のお祭りを一緒に見て回った。

最初は、視覚障がいの方のガイドとして、どのようなサポートをすればよいか、どのくらいの速さで歩けば安心してもらえるのか、など男性が落ち着いて楽しめるために、私は緊張と戸惑いでいっぱいだった。しかし、実際にその男性と一緒に過ごす中で、気持ちが和らいでいった。その男性は元気で、ずっと楽しそうに私との会話を続けてくださった。

私の肘を掴んだ手の温もりや、歩くペース、段差を越すための私の声掛け、その動作一つ一つに、私の存在が必要とされていることを実感した。それと同時に、「信じてもらっている」というよりは、「頼られている」という感覚の方が強かった。「信じる」は、人柄や能力を尊重し相手に任せること。「頼る」は、今この瞬間に助けや支えを求め相手に行動してもらうこと。どちらも信頼の形であるが、そこに込められた思いや重みは異なると思った。

私たちはつい、見えるということを当然のものとして受け入れている。障害物に恐れることなく走ったり、階段を登ったりすることが当たり前になっていて、それがなぜ当たり前なのかは、普段あまり考えていないと思う。しかし、見えないことを通して広がる感覚、人との信頼に基づいた関わりには、私たちが普段の生活の中では感じ取れていなかった大切な温かさがあった。具体的には、目の前の人の外見や視覚的な情報に頼らない分、その人の内面や気持ちにより敏感になるのだと感じた。また、手や腕を使いながら、まるで見えるように状況を把握しておられることに心を動かされた。見えないことで確かに不便さや困難はあるものの、その男性と行動を共にする中で、「見えないこと＝何かを失うこと」とは限らないのだと感じた。

このボランティア活動は、人の優しさや「見えること」「見えないこと」の両方の大切さについて、深く考えるきっかけとなった。人と人とのつながりには、目に見えるものより遙かに深い。「見えないけれど存在する大切なもの」があることを、あの男性との貴重な時間が教えてくれた。視覚障がいの方が日々どのような思いや困難を抱えているかは、私が正確に理解することはできない。しかし、昨年視覚を遮断する擬似的な体験を通して、私は自分なりにその人の世界に寄り添おうとする姿勢が持てるようになった。視覚障がいの方も

その人らしい生活を無理なく送ることができるよう支援する意識や行動を、もっと広めていく必要があるのではないだろうか。

今、社会には多様な背景を持つ人が共に生活している。違いを否定するのではなく、その違いを認めることができたとき、初めて、「共に生きる社会」の基礎が整えられていくのではないだろうか。

誰もが幸せに自分らしく生きられる社会であるため、私は視覚障がいの方の「見えにくい世界」に気づき、そっと寄り添える存在でありたい。そして、自分から見えているものが全てではないことを忘れずに、人として対等な関わりを常に大切にしていきたいと思う。一人ひとりのそんな小さな心がけの積み重ねが、誰もが安心して暮らせる社会の土台になることを信じている。